



時評

このころ浜岡1号の事故報道に、落ち書きが見られるようになった。海山町議員投票が済んだからかも知れない。配管破断の原因推定が、ウォーターハンマー、熱疲労、爆発と目まぐるしく変わり、書き立てるマスコミ自体が訳が分からなくなってきたかも知れない。怪しげな評論家の学説の紹介が、所詮恥をかいただけと知ったからかも知れない。

いずれにせよ、事故原因は調査中だった。十四日、安全保安院は、原因は融媒反応が進んで水素が自然発火、溜まった水素が爆発したと断定したという。今後再現実験等が行われるが、まだ調べなくてはならぬところは沢山ある。軽々に推測憶測を発表し世間を惑わしてはならない。ママ情報が緊急時の混乱被害を増幅させる元凶なのだ。

ところでこの事故、危険性を判断する目安は度々一かこころ。七段階の中で最も軽微なものだ。火事の場合、せいぜいボヤ程度の

ものだ。それが何故に連日マスコミを賑わす大報道となったのか。この理由を僕にきたマスコミの取材電話から探ってみよう。

断つておくが、電話の相手は複数であり、書き立てるマスコミ全体では極端な人かの一部だ。それらを僕の主題で整理しただけだ。独断と偏見の塊だが、生々しい感想でもある。

事故当初の質問は混乱していた。特に

# 浜岡騒動の教訓



**石川 迪夫**  
 いしかわ・みちお  
 一原子力発電技術機構特別顧問。56年東京機械工学を卒業し、日本原子力研究所東海研究所副所長などを経て91年、北大工学部教授。原子力専門。兵庫県出身、67歳。

が、基本的には記者の勉強不足だ。続いて現れた制御棒スタブチューブ溶接とのこと。他意はないのだろうか、事情が分からぬと人は色眼鏡で見る。注意すべき点である。

事故調査にはタスク・フォース結成が必須とされている。他意はないのだろうか、事情が分からぬと人は色眼鏡で見る。注意すべき点である。

接部の亀裂漏洩、これが問題をこじれさせた。事実だから避けようはないが、大公開の席上、權威ある先生方があれこれと破断原因の推論を翻わされたような。取材が重なる質問も打ち解けてくると、安全保安院にタスク・フォースが出た。現地調査を行ったことが記者の鼻をくすぐった。これはほんじゅう事故以来の、だが他社には負けられない。だからワイ

の何たるかを知らぬまま原稿を書いてくたさう。いろいろと勘ぐるものだ。僕の知る限り、以上の五点が今回の事故の特色だ。一つには記者諸君の不勉強があるが、それ以上に原子力界の不注意の方

が大きい。他山の石ころではない。我々自身の欠陥だ。以下、反省して改善は正に努めよう。

一つは、電力は事故第一報の重要性に十分留意することだ。事故があるとなかろうと、不断に発表訓練を怠らぬことだ。次に規制当局は、その事故の持つ原子力安全上の位置づけや重大性について、遅滞のない解説をマスコミにたいして行うことだ。尺度1の事故が毎度毎度の安全規制の鼎の軽重が問われよう。

次に、より重要なことだが、安全委員会と行政庁の役割分担の明確化だ。公開の席上での先立つた議論や結論が、後日行政庁から提出される報告と違った場合その面目と權威をどう裁く積もりか。業務の重荷がこんな弊害を生むのだ。因

感するのは国民が、よく検討してほしい。「ボヤが起きた。消したが場所が隠れた。警察が来て取り調べの最中に、裁判所まで出て来てあわてたわ言う。国家は一体どうなっているのか」。ある先達の吐き捨てるような言葉である。

「ボヤが起きた。消したが場所が隠れた。警察が来て取り調べの最中に、裁判所まで出て来てあわてたわ言う。国家は一体どうなっているのか」。ある先達の吐き捨てるような言葉である。

時評